

「底が突き抜けた」時代の歩き方 483

なぜ若者はイラクを目指すのか 救われたい「自分探し」の旅

フリーライターの渡辺一史が「『自分探し』から支え合いへ」と題する文章(04.6.10付朝日)で、「なぜボランティアをするのか」を問い、そこに「支えることで支えられる不思議な逆転関係」を見出している。本文(全文)はこのような内容である。

《遅ればせながら、イラクで人質になった高遠菜穂子さんの著書『愛してるって、どう言うの?』(文芸社)を読んだ。

読みながら、複雑な思いにとらわれた。端的にいうと、「彼女もか」という同胞意識を抱いてしまったからだ。

「生きる意味を探す旅の途中で」というサブタイトルのついたその本は、《30歳になって、独身で、現在恋人もいなくて》という彼女が、インド、タイ、カンボジアなどを旅しながら、「自分が本当に望んでいること」を見出すという、ある意味、安直なストーリーからなっている。

しかし、読後、皮肉でも笑い話でもなく、「私もインドへ行ってみようか」と思っている自分がいた。そう思ったのは、私自身が、いまだ「自分探し」の迷路をさまよっているからなのかもしれない。

「なんでオレは生きてるのかってのが、ずーっとあるんですよ。なんでオレは生きてるのか……」

昨年、『こんな夜更けにバナナかよ』(北海道新聞社)という奇妙なタイトルの本を書いた。

進行性筋ジストロフィーという難病を抱え、24時間の介助を必要とする鹿野靖明さんと、彼を支えるボランティアたちの交流を描いたノンフィクションである。

その取材で出会った学生ボランティアの、自らの存在意義を問うかのような愚直な言葉が忘れられない。

豊かな国の、豊かなはずの大学生が抱える悩みは深刻だった。彼もまた、高遠さんと同じように海外を放浪しようと大学を休学していた。しかし、持ち前の「自信のなさ」から、海外へ踏み出す勇気が湧かず、その代わりに見つけたのが「介助ボランティア募集」のチラシだったという。

鹿野さんのところには、彼の他にも、マージャン^{さん}三昧の怠惰な生活を「なんとかしたい」と思って来る学生や、あるいは、冷え切った夫婦生活の末に、「夫にとって私って何?」といった根源的な不安を抱える主婦もいた。

そして、「なぜボランティアをするのか?」という問いを重ねる途上で、一人の女性ボランティアがつぶやいた言葉にはドキリとさせられた。

《一人の不幸な人間は、もう一人の不幸な人間を見つけて幸せになる》という言葉だ。ボランティアとは、ヒマと余裕があるからするものではない、という事実を知った。

「障害者介助の現場」で目にしたのは、人と人が支え合う「美談」でもなければ、善意と共感が渦巻く「感動ドラマ」でもなかった。

むしろ、そこは、幸・不幸のパイをめぐる、食うか食われるかのシビアな争いが繰り広げられる戦場であった。

一方の鹿野さんもまた、少しも「不幸な人間」らしいところがなく、したたかにワガママに自己を主張する人だった。頼りないボランティアには「帰れ！」と一喝し、生活上の「あれしろ、これしろ」を容赦なく突きつける。

彼の欲求は「普通に生きたい」という切実かつ正当な要求なのであり、その根底には、「人にものを頼むのは当然の権利」という思いがある。

ときに「弱者」であるはずの鹿野さんに押しつぶされるボランティアもいるなど、両者のやりとりは、鋭い対立や葛藤を生む。「愛」と「憎」がない交ぜになった濃密な人間関係がそこにはあった。

私は取材しながら、いったいどちらが「障害者」でどちらが「健常者」なのか、どちらが「支える側」でどちらが「支えられる側」なのか、わからなくなることがしばしばだった。

昨年から今年にかけて、大学や専門学校のゲスト講師として呼ばれる機会が増えた。

講義の中で私は、取材をとおして目にした、その不思議ともいえる逆転関係について、実体験をまじえて話すことにしている。

「不思議なのは、人に頼りっぱなしの鹿野さんがとても強い人間に思えることです」
(大学4年・男子)

学生たちのレポートやリアクションカードの中に、思いがけず新鮮な言葉を見出すたび、ますます考えさせられる日々なのである。

「私たちは、人に迷惑をかけてはいけないという観念に憑かれている一方で、どこかで人に迷惑をかけてほしい、人の役に立つことで自分の存在を確かめたいという矛盾した気持ちを抱えていると思う。そう考えると、『迷惑』って何だろうって思う……難しい」(大学2年・女子)

確かに難しい。しかし、「他人に迷惑をかけないこと」(自己責任)が金科玉条のごとき規範になっているような社会は生きづらい。

「私は、人に迷惑をかけずに生きているようなスタンスなので、時々とても孤独を感じてしまいます」(大学4年・女子)

そもそも社会とは、「人を支えること」で支えられるという原理によって成り立っているはずなのだ。

しかし、そのことが、とても見えづらい社会に、いま私たちは生きている。》

この文章全文を抜き書きしたのは、「自分探し」の旅が自分自身の中で突出せざるをえなくなるほどに、日本の若者たちの置かれている現在が、物質的に豊かであればある

ほど、生き辛さを増していることが鮮やかに浮き彫りにされているのを感じ取ったからである。そんな若者がボランティア活動に従事することによって、自らの身を立て直そうとしても、おとなしく面倒を見られる筈のボランティアされる側からの激しい反撥と攻撃を食らって、たちまち立ち往生するに至る。ボランティアされる側もまた、《「普通に生きたい」という切実かつ正当な要求》をもっているなら、ボランティアする側のストーリーづくりのためだけに存在させられることを拒否しようとするのは、至極当然のことであった。ここで浮かび上がってくるのは、ボランティアにとってのボランティアをせざるをえなくなる不幸の意識であった。

ボランティアされる側は、ボランティアされなくてはならない事情に括り付けられている。つまり、援助されなくてはならないという点では、そこに選択肢はない。しかし、若者にとってボランティアは選択不可能な途ではない。「生きている実感」を強く味わいたいなら、オウムのような宗教活動にコミットする途もあったし、香田証生さんのように海外を放浪する途もあった。あるいは、身近なスポーツなどに熱中することによって、心身を鍛えることで「生きている実感」を手にする方途もあった。要するに、ボランティアは多くの選択肢の中の一つにすぎなかった。嫌になれば、ボランティアはやめることができる。だがボランティアもまた、一度その中に飛び込めば、嫌であってもやめられなくなっていく。それはなぜか。

選択肢のあるボランティアが直面する相手は、ボランティアを求める点では選択肢のない相手であった。相手には選択肢がなかったが故に、ボランティアに対して迷うこともなかった。ところが、ボランティアの側に選択肢があることによって、迷いが生じてくる。この非対称的な関係は、迷うことなくボランティアを求める側の強さによって、やがて突き崩されていく。なぜなら、選択肢のない相手によって、選択肢があるボランティアの立場が追い込まれるからだ。いいかえると、ボランティアは自らの選択肢性を自ら封じ込めずには、選択肢のない相手に向き合えなくなっていく。ボランティアをすることは、選択肢のない相手と同じ場所に立つことであり、ボランティアはそこから始まっていくしかないからだ。

ボランティアされる側がボランティアを必要とせざるをえない点で、「弱者」であることは紛れもない。逆に、ボランティアが「弱者」に手を差し伸べることができる点で、「強者」であることも明白である。しかし、「人にものを頼むのは当然の権利」と思うようになったとき、障害者は「弱者」から脱している。自分では何も出来ない存在であることから、自分を相手に委ねることのできる存在へと変わるからだ。このことはボランティアからすれば、相手になにかをしてやることのできる存在から、自分にすべてを委ねる相手をかかえこまなくてはならない存在へと自分が変わることを意味する。したがって、《一人の不幸な人間は、もう一人の不幸な人間を見つけて幸せになる》という言葉は、ボランティアはボランティアされる《人間を見つけて幸せになる》ことであると同時に、ボランティアされる側にとっても、ボランティアする《人間を見つけて幸せ

になる》ことであるということに気づく。

ボランティアされる側がボランティアされることで追い込まれているなら、ボランティアもまた、ボランティアすることで追い込まれている。鎬しのぎを削り合っていく関係がそこには垣間見られる。だから、《ボランティアとは、ヒマと余裕があるからするものではない》、逆にいえば、ヒマと余裕があるなら、ボランティアはできるものではないということだ。《「障害者介助の現場」で目にしたものは、人と人が支え合う『美談』でもなければ、善意と共感が渦巻く「感動ドラマ」でもなかった。むしろ、そこは、幸・不幸のパイをめぐって、食うか食われるかのシビアな争いが繰り広げられる戦場であった。》ボランティアは《ヒマと余裕がある》者がするもの、とみるのが部外者であったように、ボランティアに「美談」や「感動ドラマ」を覗き込むのも部外者であった。ボランティアする者もされる者も、切羽詰まったものをそれぞれの内部に深くかかえこんでいることを知らないから、そんな呑気なことがいえたのだ。

障害者介助を受ける側が、《頼りないボランティアには「帰れ！」と一喝し、生活上の「あれしろ、これしろ」を容赦なく突きつける》光景を目撃した筆者は、《取材しながら、いったいどちらが「障害者」でどちらが「健常者」なのか、どちらが「支える側」でどちらが「支えられる側」なのか、わからなくなることがしばしばだった》と記している。それは、筆者がボランティア＝「強者」、ボランティアされる側＝「弱者」の図式的思考にとらわれて取材していたからだ。だが「現場」にいったん踏み入ると、ボランティアする側とされる側の生身の激しい衝突の前では、そんな図式はブツ飛んでしまう。ボランティアされる側がおとなしい「弱者」の枠組みから逸脱する度合いに応じて、ボランティアする側もしてやる「強者」の枠組みから逸脱するのが免れえなくなる。

障害者がボランティアにむかって、「帰れ！」と一喝したとき、もちろん、ボランティアは腹を立てて帰ることもできた。そうすると、ボランティアに置き去りにされた障害者が、自分の力で何もできなくなる状態に戻るのには目に見えていた。ボランティアが「帰れ！」と怒鳴られて帰ることは、移動や生活の困難な障害者を放り出すことを意味していた。下手すると、その障害者は餓死するかもしれなかった。介助に必要な障害者を見捨てることは、ボランティアが障害者の生命を左右することに直結していた。そうなると、大半のボランティアにとって「帰れ！」と一喝されたからといって、帰れる筈がなかった。「帰れ！」と一喝された腹立たしさを抑えながら、自分に介助を委ねている相手の面倒を見ないわけにはいかなかった。自分の生命を委ねてしまった者のほうが、生命を委ねられた者よりも強い立場にあるように見えるのは、もはや後に引けない関係性の中ではあまりにも自然の道理であった。

この、《幸・不幸のパイをめぐって、食うか食われるかのシビアな争いが繰り広げられる戦場》としてのボランティア活動に無知を曝け出しているのが、『SAPIO』(04・5・26)で語っている曾野綾子である。彼女はボランティアについて、こう主張する。《以前から感じていることなのですが、日本のボランティア活動で不思議なことは、「ボ

ランティアしなければ気がすまない」というふうに、変に焦っている人たちがいることです。そうした人たちの大半はまだ若い人たちで、お金もつてもないけど、とにかくボランティアはしなくちゃ、と顔を引きつらせている。

でも、ボランティアというのは、余裕のある時にのんびりとやればいいんですね。いつでも収入の10分の1は寄付する人とか、お金は出せない代わりに家にあるコンピュータを1台持ってくるとか、そういう人たちが集まってはじめてスムーズに動くものなんです。》

ボランティアする若者たちが、《「ボランティアしなければ気がすまない」というふうに、変に焦っている》ことには気が付いているけれども、なぜ彼らがボランティア活動に対してそうなってしまうのか、について一度も考えてみたことがないから、年長者として《ボランティアというのは、余裕のある時にのんびりとやればいいんですね》などと、モノを言うことになってしまうのだ。《ボランティアとは、ヒマと余裕があるからするものではない、という事実》とは、少なくともここでは無縁である。確かに、《余裕のある時にのんびりとやればいい》ようなボランティアもあるだろう。しかし、渡辺一史が取材してきた《幸・不幸のパイをめぐる、食うか食われるかのシビアな争いが繰り返される戦場》のようなボランティア活動とは、それは隔絶している。

どちらのボランティアのほうがよいか悪いか、という問題ではない。曾野綾子のボランティア体験やボランティア観からは、自分も救われたいと願いながら悪戦苦闘している若者たちのボランティア活動がみえないにもかかわらず、同じボランティア活動とみなして地続きに苦言を呈したり、注文をつけたりするところに問題がある筈だ。つまり、自分にはわからないことがあるということがわからないから、どうしてもわかった振りをしてしまうのである。

《ボランティアにはさまざまな考えを持つ方がいらっしゃるので一概に言えるものではありませんし、イラクでボランティア活動をしていた女性の考え方を否定するつもりもありません。ですが、日本に蔓延してしまった「善意でやっているのだからボランティアはすばらしい」という意識はちょっと困りますね」と彼女がいうとき、その言葉がいくらかでもイラクで人質になった女性ボランティアに向けられているとすれば、それはお門違いといわねばならない。善意などが吹っ飛んでしまったところでボランティアに取り組んでいるだろうからだ。

ボランティアに「善意」を感じたり、「美談」を見出したり、「感動ドラマ」を捜し求めようとするのは、ボランティアを知らない人たちであって、おそらくボランティアを少しでも知れば、へとへとになるほどの凄まじい格闘抜きにはボランティアなど存在しえないことにすぐに気づく筈である。それで嫌になってやめる者もいるだろうが、大半の者がそれでもボランティアから手を引かないのは、これまでけっして一度も味わったことのない濃密な人間関係に圧倒されつづけているからだと思われる。ボランティアなんかしないほうが楽だけれども、その楽を貫く空虚な日常性に二度と戻りたくないという思いに駆られつづけているのだろう。《豊かな国の、豊かなはずの大学生が抱える悩

みは深刻》であるのは、その豊かさは彼らの外にあって、豊かであればあるほどその豊かさが自分の貧相を際立たせるように、強く押し迫ってくるのが感じられているからだ。《豊かな国の、豊かなはずの大学生が抱える悩み》は必ず、「なんでオレは生きてるのかってのが、ずーっとあるんですよ。なんでオレは生きてるのか……」という自問を根底に抱え込んでいる。だがよく考えれば、このような自問に向き合えるようになった生活の余裕こそが、豊かになった証拠にほかならない。日々汗まみれの、追いまくられた生活からはけって湧き上がってこない自問であるからだ。しかしながら、生活が豊かになったおかげで自分が生きていることの意味を自問せざるをえなくなるのは、貧困の辛さとはまた異なる質の辛さであるのは間違いない。なぜなら、その自問に答えはなく、果てしがないからだ。貧困は豊かさを目指すことができるが、「なんでオレは生きてるのか」という自問は、一体どこを目指せばよいのかわからない。その自問に深く捉われて離れられない者は、かくして「自分探し」の旅に赴くことになるのだ。

若者たちにとってのボランティアが「善意」でも「美談」でもなく、必死の「自分探し」の旅の途上にあることを理解しなければ、彼らの無防備さや判断の甘さばかりが鼻に付いて、彼らの懐の中の息苦しさを覗くことはできない。ジャーナリストの日垣隆も同誌で、《もともとボランティアとは、義勇兵の志願者を指した。今もそれは無料奉仕のことではなく、自分の意思で、というニュアンスが核心にある。(中略) /では、仕事とボランティアの違いは何か。仕事には、原則として依頼者があり、広義の納品というアウトプットが伴い、そこに対価や給与が支払われる。日本語で言うボランティアには、往々にして依頼者がいない。依頼がないのに自発性だけが突出すると、正義感と使命感がひとり歩きしやすい。依頼者を前提とする限り、唯我独尊は通用しない。逆に言えば、依頼者がなく自発性を全面に出すと、独善の世界へ簡単に没入してしまう》と、一般論をいいながら、イラクの人質女性を指して、《地球の反対側にいる他人の世話を焼きたいのなら、まず自分で自分の面倒を見られるようになってからにしたほうが良いのではないか》と、具体的に口にするとおかしくなってしまう。

若者たちのボランティアをみるかぎり、日垣隆のこの考えは転倒している。《自分で自分の面倒を見られ》ないから、彼らはボランティアをせざるをえないのであって、少なくとも《自分で自分の面倒を見られるようにな》れば、彼らがボランティアする必要はなくなっている。日垣隆の考えるボランティアと、若者たちが着手しているボランティアとは重なるところがない。だから、彼らは《他人の世話を焼きたい》ためにボランティアするのではなく、持て余している自分の世話を焼きたいから、《他人の世話を焼くことへと踏み入っているのが、どうしても彼の場所からはみえないのだ。曾野綾子や日垣隆は日本のボランティアについて苦言を呈しているのであろうが、若者たちにとってのボランティアは本当は、ボランティアという呼称では捉えることの出来ない、豊かな社会の根底を貫く空虚さとの闘いをしいられる戦場の別名かもしれないことを、彼らのすれちがう言説はますます浮き彫りにしている。

若者たちがボランティアされる側を「救う」ためではなく、自分が「救われたい」ためにボランティアを行っていることは明白である。そもそも彼らは援助を必要とする「弱者」に手を差し伸べることができるほど、「強者」であるわけではない。彼らはボランティアをせざるをえなくなるほどに「弱者」であり、彼ら自身自分がどうすることもできない「弱者」であることがわかっている。もちろん、「弱者」である自分を彼らが肯定しているわけではない。だからといって否定するほどの強さも持っていない。だからこそ、自分が「強者」として振舞うことができるかもしれない、少なくとも「弱者」であることを意識せずに済ませられるボランティアの世界へ逃れていこうとするのだ。曾野綾子という《余裕のある時にのんびりとやればいい》ボランティアや、日垣隆がいう《自分で自分の面倒を見られるようになってから》するボランティアは、ボランティアの若者たちを頭から「強者」とみなしているのだ。

「なんでオレは生きてるのか」という若者たちの自問がポジティブにではなく、ネガティブにしか響かないのは、彼らが自己肯定感の希薄な中で自問を発しているからである。というより、彼らの自己肯定感のあまりもの希薄さが、彼らにその自問を発せずにはいられなくしているといえるだろう。もちろん、自己肯定感の希薄さは彼ら自身が招来したものである。自己肯定感が希薄な社会の中で彼らは呼吸せざるをえなくなっており、そんな社会を戦後日本は豊かさを目指すなかでつくりあげてきたのである。したがって、「なんでオレは生きてるのか」という自問は若者たち特有のものではなく、自己肯定感の希薄さがいまの社会に生きる誰にもむかっても眩かせずにはいられないものであり、若者たちがこの自問に真正面から直面しているのは、彼らがおそらく自己肯定感の希薄さに最も耐えられなさを感じているからだと思われる。

自己肯定感の希薄さに藻掻^{もが}いている若者たちは、《「自分探し」の迷路をさまよっている》が故に、自分を「弱者」と思っている。イラク人質事件の三人もまた紛れもなく、イラクの戦場へと自らを強く押し出した、自己肯定感の希薄さに藻掻く「弱者」にほかならなかった。「弱者」であることから抜け出そうとする「自分探し」の旅へと、自分自身を追い込んでいった若者たちであったが、精神科医の斎藤環は『中央公論』の連載時評(04.6)で、彼らが「弱者」以外の者ではありえなかったという事実に注目して、《私たちはどうしようもなく「弱者」が好きで(...)私たちは「弱者」の臭いに敏感だ。「弱者」を前にしたとき、私たちはとたんに冷静さを失い、言わずもがなのお節介まで口走る》と述べながら、こう論じる。

《最近最も「人気」を集めた「弱者」が、イラク人質事件の三人であったと言えば、意外に思われるだろうか。しかし、精神分析的に言うならば、「バッシング」の欲望もまた「愛」なのである。彼らを一度でも叩いた人々は、彼らの存在を前に冷静でいられなくなるほど、あの三人が好きだったのだ。必要とされる寛容さを忘れるほどに。

とりわけ「自己責任」論の濫用ぶりに、こうした傾向が如実にあらわれた。私見では、「自己責任」とは、「人質になっても自業自得」という意味では、断じてありえない。

それは、万が一殺されるようなことがあっても、所属団体や日本政府の責任は問わない、というほどの意味でしかない。(中略)

いったいに私たちは、愛する資格があると確信できるまでは、対象に無関心である。しかしひとたび、その資格を手にしたと確信すれば、私たちの愛は一拳にみさかいのないものとなる。今回の事件で私たちの正当性を支えたのは、なによりも「自己責任」の論理、納税者の論理、そして人質およびその家族の「自己中心的な主張」であった。私たちは正当性のもとに連帯したのち、安全地帯から思うさま彼らに愛を注いだ。そう、誹謗中傷という愛を。》

三人が危険を冒してまで戦場のイラクに「不幸な人間」を見つけに出かけるほど、「不幸」であるという意味で、彼らが「弱者」であるとみなされているわけではなく、「バッシング」という「愛」の嵐を激しく降り注がれるほど、彼らは世間の前にその弱々しい姿を晒したという意味で、「弱者」であったということにほかならない。彼らは渡航自粛が勧告されている危険なイラクにまで、日本を越えて渡った拳句、拘束されてしまった。この事実だけをみるなら、国内にいる日本人と彼らとの間には同じ邦人であるという以外、どこにも接点はなかった。しかし、自衛隊撤退を要求する《人質およびその家族の「自己中心的な主張」》によって、世間が彼らに振り向くことになった。彼らに日本(国)から飛び出してしまった者たちや、また日本(国)を捨てた者たちの臭いを感じ取ったからだ。日本(国)を捨てて日本から飛び出してしまった者たちが、どうして自分たちが助かるために、捨てた日本や日本人に救出の手を求めるのか、ということにバッシングが集中した。

東大助教授の北田暁大は『草の根口マン主義』(『論座』04.8)のなかで、こう論じる。《人質バッシングにさいして私は、いくつかのメディアで次のような分析を提示した。すなわち 今回の事件の被害者たちがバッシングを受けたのは、「かれらのリスク認識が甘かった」からではない。むしろ、かれらの政治的な立ち位置が「反政府的」「市民派的」なものであった(市民的なキャラクターであった)からこそ、かれらは叩かれたのである。「自己責任」云々といった「理屈」はかれらのキャラ叩きを正当化するために持ち出されたレトリックにすぎない」と。

(中略)自己責任の有無を問おうとしているのか、被害者三人の「キャラ」をもてあそばさうとしているのか、にわかには識別できないような記事や発言が次々と生み出され、消費されていく。その過剰な熱意を支えたのは、本当に「自己責任」への自覚だったのだろうか。責任倫理が希薄であると言われてきた日本人が「自己責任」という倫理に突如目覚めたというのだろうか。むしろ、「自己責任論」なるものは、無責任にキャラ叩きに興じるために「発見」された後知恵にすぎなかった、と考えるほうが自然ではなからうか。》

人質バッシングをメディアに先んじて展開した、「朝日」「岩波」のような「市民派」メディアの語り口(スタイル)を毛嫌いし、反市民主義的な含意をもった書き込みを連

ねていくという傾向があ》る《2ちゃんねるの流儀からすれば、高校生の頃から市民活動にコミットしてきた今井紀明氏や、「ひとりNPO」を実践している高遠菜穂子氏などが、「嗤い」の標的となるのはけだし当然のことであった。おそらく「自作自演」説を本気で信じていた「2ちゃんねらー」はほとんどいない。かれらの多くにとっては、市民派然とした今井氏や高遠氏のキャラを転がしながら、おもしろおかしくコミュニケーションを紡いでいくことこそが重要事だったのだ。》

三人の人質は冷戦終焉以前に羽振りを利用していた「朝日」「岩波」的な「市民主義」に安住して、イラクに出かけている臭気を漂わせていた。その「市民主義」的な言説に抑圧を感じてきた世代は、冷戦終焉によってもはや「市民主義」的な言説がかつての勢いをもたなくなったのを感じ取るや、その言説にとどまらず、あらゆる「市民主義」的な雰囲気や否定的なことに自らのポジションを確保し、そこに「愛国心」だの「反市民」などのイデオロギーを盛り込んで、新たなロマン主義を紡ぎだすようになったと北田氏は指摘し、人質バッシングのなかにネオ・ロマン主義が大きな顔を覗かせていることを問題視する。

《旧来の思想の枠組みが流動化するなかで、「思想を語る人」を否定する、という形で見えかろうじて自らのポジションを確保しようとする欲望、自らの位置をメタ化しつつ世界・社会のほうをネタ化する形式主義がせり出してくる。好敵手なきところに仮想敵を作り、仮想敵のキャラを物語的に消費する態度　それが現代に回帰した「ロマン主義」のあり方とはいえないだろうか。いまや誰も「右でも左でもなく」といい、市民的＝学級委員長的な語り口を批判する。イラク人質バッシングは、不気味に広がるグラスルーツ・ロマン主義の「氷山の一角」だったのである。

こう考えてみると、バッシングの矛先が「左派的」な政治信条を持つイラク人質事件被害者のみならず、おおよそ「左派的」とはいいいがたい拉致被害者の家族会に向けられたことも納得がいく。現代のロマン主義者たちは、左派的なイデオロギーに対して攻撃を加えているのではない。そうではなくて、かれらは市民主義的な語り口、「無謬の正義の立場」に立っているかのような語り口を拒絶しているのである。だから、たとえ「左派的」なポジションにない人であっても、市民的な語り口を先鋭化させるなら容赦なく攻撃することだろう。》

このネオ・ロマン主義は北田氏によれば、《「お上のやることには文句を言うな」という積極的・教条的な体制主義ではな》い。三人の人質にむかっては「反体制を気取るな」とバッシングし、小泉訪朝を手厳しく批判した拉致被害者の「家族会」にむかっては、「市民主義」的な振舞いに傾きつつあることに集中砲火を加え、《「家族の『帰国』に感動したい私たちの物語を乱すな」といったロマン主義》を突き出してくる。ここでイラクで銃撃されて殺害された橋田信介さんたちが一度もバッシングされる目に遭わなかったのは、果敢な戦場記者であったことや、「覚悟していた」という家族の気丈な振舞いだけではなく、それ以上に当人たちが家族も「市民主義」的な語り口とは全く無縁であ

り、それどころか、「市民主義」的な世界に背を向けたところで活動し、生きてきていることが、ネオ・ロマン主義の諸君にも感じ取られたからにちがいない。

橋田信介殺害事件に関して先の斎藤環流にいえば、橋田氏たちは愛されるほどのつながりを見出されなかったから、バッシングされることすらなかったということだ。もし三人の人質が橋田さんたちのように、「市民主義」的な語り口や振舞いとは全く無縁なかたちで我々の前に登場してくるなら、彼らを「愛する」ことはなかっただろうか、バッシングしなかっただろうか。おそらくそれはそれでバッシングを喚び込んでいたと思われる。彼らとバッシングする者たちとは、「市民主義」的な臭いでは結びつかなくとも、双方が「なんでオレは生きてるのか」をどうしても自問せずにはいられない、自己肯定感の希薄な「弱者」であることにおいてつながっているからだ。「市民主義」的な雰囲気をもほとんど漂わせていなかった香田証生さんが、にもかかわらず、少なからずのバッシングを浴びることになったのは、彼もまた危険なイラクに出かけることによって「弱者」の位置から抜け出そうとしている（ようにみえる）ことへの、国内に残留する膨大な「弱者」からの嫉妬を買ったためかもしれない。

そんな香田さんに濃厚な「市民主義」的な衣装を身にまとわせたとき、彼も三人の人質の仲間入りをすることになる。そうなると、彼もまた三人と同様に、猛烈なバッシングを浴びなければならない。斎藤環は三人に対する凄まじい「愛」の屈折について、続けて語る。

《対象が「ものいわぬ弱者」である場合、私たちは無言の余白に美談という物語を投影しつつ、ストレートな愛を差し向けることができる。しかし今回のように「主張する弱者」に対しては、私たちの態度は一変する。美談の投影を許さないという意味で私たちのナルシズムに抵触する、彼ら「主張する弱者」に対しては、私たちの愛もまた屈折したものになるほかはない。すなわち誹謗中傷であり、罵詈雑言であり、バッシングの嵐である。私たちの愛は、本来愛されるべきはずの人質事件の犯行グループの存在を完全に忘れさせてしまうほど強く、それが人質の心理にもたらす効果をも配慮できないほど熱狂的だった。このように愛の対象との遠近法を誤ることを、精神分析は「倒錯」と呼ぶ。そう、一連のバッシングこそは、私たち倒錯者の姿を映し出す鏡にほかならなかった。》

人質の家族の「自己中心的な主張」がすでに存在している以上、三人がいくら無言を押し通そうとも、その無言自体が頑くかな抵抗とみなされて「ものいわぬ弱者」の位置を占めることは無理であった。政府の渡航自粛勧告を振り切って、戦場のイラクに活動の場を求める彼らの積極的な意思を更に差し込むなら、彼らが「ものいわぬ弱者」として世間に取り扱われることになるのは到底考えられなかった。彼らが「ものいわぬ弱者」を装うこと自体が、世間の反撥により一層油を注ぐことになっただろう。しかし、彼らは「ものいわぬ弱者」としてでなく、「主張する弱者」として我々の前に登場することになった。なぜ彼らは「主張する弱者」として振舞うことになったのか。彼らが自分の行動に誇りを持つとうとする信念の持ち主であったとか、彼らが自分の行動の拠り所とし

ていたかもしれない「市民主義」的イデオロギーへの信仰が「主張する弱者」へと押し上げていったとか、さまざまな説明がつくが、もっと根本的な理由は彼らが自分たちの活動の場を日本ではなく、イラクに求めたところに潜んでいたと考えられる。

三人に対する批判の一つに、「日本国籍を持つ以上、日本人であることを逃れ得ないという自覚が欠如している」という指摘があった。この指摘はまさにその通りであり、海外でのどのような振舞いも、個人としての振舞いであると同時に(いや、それ以上に)日本人、あるいはアメリカ人としての振舞いに還元されていく。この当然のことが、とりわけ高遠氏や今井氏に把握されていなかったとは思われない。おそらく彼らもそのことは十分承知していた。しかし、彼らは自分が海外では紛れもない日本人の一人とみなされることに反撥していた、と推測される。自分たちが居場所のない日本から飛び出してきた個人であったからだ。彼らはイラクでは一人の日本人としてではなく、どこまでも高遠菜穂子個人や今井紀明個人として行動しようとしていたことが窺われる。ところが拘束事件は、そんな彼らの決意を打ち砕いて、彼らを一人の日本人へと戻してしまったのだ。彼ら自身不本意であったろうが、彼らは「主張する弱者」へと押し上げられていたし、飛び出された日本(人)のほうも人質事件によって、彼らが日本人として取引の材料として使われることに釈然としなかったことが、バッシングの根底に横たわっていたと考えられる。

《いじめの加害者は、みずからのいじめ行為の正当性を確信しているときに、最も残虐性を発揮する。このとき「正当性」を強化してくれるのは、ときには教師ですらうっかり口にする「いじめられる側の責任」という言葉だ。そう、この言葉こそは、今回濫用された「自己責任」と同様に、私たちの倒錯した愛を正当なものに偽装してくれる。》

三人に対するバッシングが「いじめ」でしかないことを看破して、斎藤環はこういう。「いじめられる側」「人質にされる側」「レイプされる側」「虐待される側」の責任などというものは存在しない。存在しないから、いじめ行為を正当化するために捏造されるのである。《いじめられる側に、事実として性格に問題があったり、挑発行為が見られたりしたとしても、それは責任とは呼びえないのだ。》

ところで、倒錯した愛もまた、「愛」なのであろうか。一方的にバッシングや暴力を振舞われる被害者は、それらの行為を《弱者へと向かいがちな「過剰な愛」》として受けとめねばならないのだろうか。「愛」とはそれを受け止めるものがそう感じたときにはじめて、存在するものではないのだろうか。だから斎藤環は、《「愛」が禁じられた場所で、いかにして弱者の存在を見出し、その救済をはかるべきであるのか》と問いかけるが、そこでの「愛」とはもちろん、一方的な「倒錯した愛」であるし、彼の視野には「児童虐待」が大きく入り込んでいるとして、「倒錯した愛」を過剰に振り撒く者もまた、強者(いじめる側) 弱者(いじめられる側)の図式に収まることのない「弱者」として、生きるための自問にいじめられつづけていることを見落としてはならない。

2005年6月5日記